

# 心をよつめる

その八

北九州市内・近郊の寺院の僧侶にお言葉をいただく  
コーナーです。老後を心豊かに生きるためのヒント  
となりますように・・・。



痛き心堪えつつ居らむ余りにも

嘆かば妻の憂へなむかも

窪田空穂

この堪えがたい痛む心を堪えていこう、妻を亡くした私の嘆きが、寂静の世界に安らいでいる妻の心を、憂えさせ乱すかもしれないので

人生を共に歩んできた大切な伴侶をなくされた方の、抑えようとして心の底にしまっている深い悲しみが、切々と伝わってくる歌ですね。御自身の心をおさえ、亡き方を思いやり、御自身を励まして、何とかしてこの悲しみを超えていこうとされて来たことが、そのままに受け取られます。しかしこの歌の作者のお気持ちちは、堪えがたい悲しみの決着がついたということではなく、亡き妻の心を乱さないように、心の底に悲しみをしまいだもうとされても、なお突き上げてくる悲しみに傷んでおられるという事でしょう。そこから一步も出られておられないのでしよう。どうすればこの痛む心をほどくことが出来るのでしょうか。

愛する者を失った悲しみがなくなるとすれば、その人が、元どりに生き返ってくられる以外には、どんな慰めの言葉

や、自分の心の思い返しや、仕事に打ち

込むことや、酒や遊びによっても癒されることはないでしょう。そして、亡き方が再び帰ってこないことは、重々わかっているし、また、自分自身それを求めているわけでもありません。悔やむ必要がないのに、でも心の底の痛み悲しみ、そしてこの嘆きは、いったい何なのか。心の底の悲しんでいる自分自身の姿は何なのか。何を悲しんでいるのか。それを見つめた時、かすかに光が差し始めます。

亡き妻を悲しく偲ぶこの心は、自分のどんな思いから起こってくるのか。共に暮らした日々の積み重ねの中で、紡がれた様々な思いや願いが、分ちちがたく絡みあって、すっきりと整理がされるといふことにはならないでしょう。しかしながら、凡そ二つの根っこに横たわる思いに出会います。一つは亡き妻がいたわしい、苦労ばかりを掛けて充分に報いることもできずに、したいであったらどううともさせてあげることでもできなかったと、亡き人の為に痛む心でしょう。もう一つは、妻が亡くなった事が、自分にとって困るという事、話す相手がいらない、笑いあって喜びを分かち合う相手がいな



真宗大谷派 浄喜寺  
釋 良哲 住職



浄喜寺  
行橋市大字今井 1802  
TEL 0930-23-0354



行橋市指定有形文化財  
紙本著色良慶上人像

い、喧嘩もできない寂しい。炊事・洗濯・掃除様々な家事が慣れずに、いちいちが苦痛だと、我が身の為に感ずる悲しむ心ではないでしょうか。亡き人を大切に思う心と、自分を中心にして思う心の二つに気付いた時、私をとらえて放さなかった悲しみの本当の姿が明らかになるのでしょうか。

愛する者の死という厳肅な事実を目前にして、利害打算を超えたと思われる心にも、意識に無い心の奥底に潜むエゴイズムの動きに、煩惱の深いことを知らされ、罪の重いことに気付かされるのではないのでしょうか。そして、この心はいくら努力しても、哀しいけれども、自分ではどうしても取り去ることができないのです。煩惱成就の身であることーそれが私自身の正体であったと知らされるのです。しかもそうあることが、私には苦しみのです。ここに人間が救われなければならぬ存在の有り様があるのです。摂取不捨の阿弥陀如来の悲願は、この様な私のために建てられたのです。私たちは、中途半端に、自身の醜いエゴイズムから目をそらさず、この醜い心を抱えたまま「人皆尊し。無量・無数・

不可計なる阿弥陀の働きによってささえ

られた人生であることに目覚めれば、いかなる人生であろうとも身を尽くして生きるならば必ずや、全ての人が例外なく、その人生の意義を受け取ることができるといふ阿弥陀如来の悲願を仰いで、常に照らされ続ける人生を歩むことです。長い人生の道のりが必ず、エゴイズムが人を傷つけ自分も傷つける浅薄さに気付かせてくれるでしょう。

同じ様に、奥様を亡くされて苦しまれたある人が仰ってくれました。「家内は美しい仏になっておったのです。それを、私の悲しみて、無理にこの世に引き留めて、家内が仏になることを妨げていたのです。これからの私は、家内が本当の仏になれるようにこころがけねばなりません。」  
たとい大千世界に満てらん火をもすぎゆきて佛の御名をきくひとはながく不退にかなうなり  
親鸞聖人「浄土和讃」  
南無阿弥陀仏 釋良哲